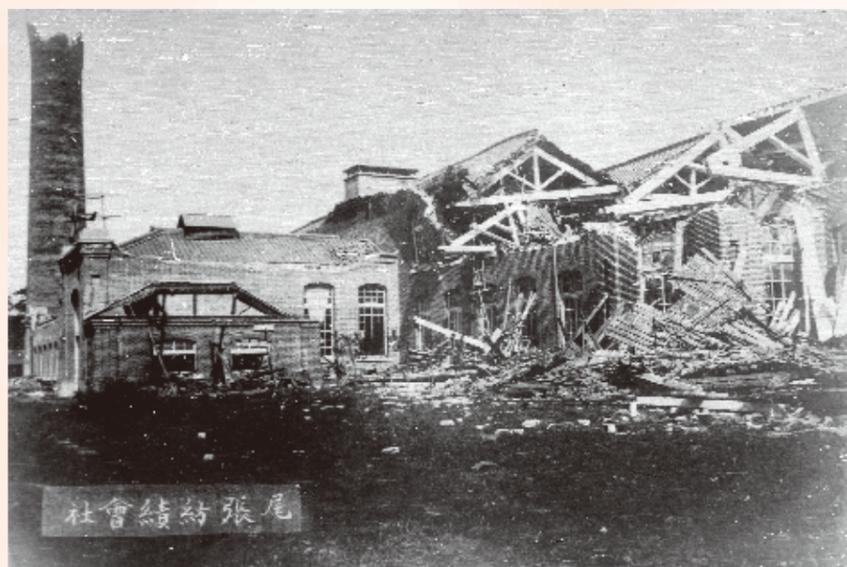


社会にもたらした影響

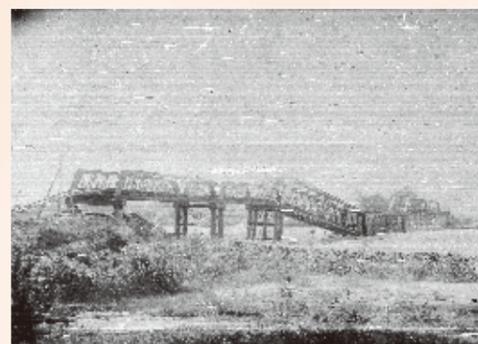
濃尾地震は、明治以降の近代日本が経験した初めての巨大地震でした。当時の日本は富国強兵を掲げて近代化を急ぐ途上であり、軌道に乗り始めた交通インフラの整備や産業、教育等の面でも大きな被害を受けることになりました。



↑尾張紡績会社



↑海西郡野寺村の酒蔵破壊



↑長良川鉄橋

「日本古来の土蔵造りの建物は無事だったがレンガ造りの建物は倒壊した」という話がありますが、これは当時まだ質の良い建材が手に入らなかったことや、一部の著名なレンガ造の建物が倒壊したので目立ってしまったということが考えられます。

しかし一方では、地震研究や震災対策が大きく発展するきっかけともなりました。

地震発生の翌年 1892 年、明治政府は「震災予防調査会」を設立しました。これまで原則として地震災害の対応は被災地周辺の自治体が行っており、国は予算を出すのみでしたが、これ以降、国としての計画的な地震災害対策が始まっていきました。

メディアとボランティア

当時各地に誕生していた新聞社は競ってこの災害を大きく報じ、義援金を募るなどして全国の関心を被災地に向けました。被害の大きさを知った各地の人々は、今で言う医療ボランティアとして駆け付けたり、援助物資を送ったりするなど、災害に対する連携の輪が大きく広がりました。このように濃尾地震の発生は、社会全体で災害による被災者を支援しようとする意識が全国に広がっていく出発点となりました。



↑枇杷島鉄道橋

←名古屋郵便電信局



↑木曾川堤防

写真出典：すべて岐阜地方気象台